宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像
福岡県宗像郡玄海町
電話 09406 ⑥ 1311 代
定価　一年送料共 1000円

神具、装束
結婚式場用品
九州店
本社
株式会社 井筒
福岡市博多区東公園一一三一（〒八一三）
電話福岡（〇九二）六五一九四五六番
京都市下京区油小路八条北入（〒六〇〇）
電話京都（〇七五）三四一三四一（代）～四番
三五一一三四・二〇六六番

昭和五十四年の黎明を迎え
御社頭大いに賑う

昭和五十四年の新年は絶好の正月日和に恵まれ、最高の参拝者で社頭は立錐の余地もない程大いに賑った。

大晦日より初詣の自動車の長蛇列は国道三号線赤間・福間間はもとより東郷東口の交差点を過ぎて大社まで県道四糸間の参道は自動車のライトの光に照し出され真昼のような明るさを呈した。

除夜の一番太鼓の響きと共に神門は開扉され、恒例により、本殿に於ては門司鉄道管理局長以下国鉄幹部職員一同参拝の上、業務繁栄、安全運転、無事故の祈願が行われた。社頭では庭燎が焚かれ、真赤な焔が神苑の大楠を照らし一入壮厳味を増す中に続々と参拝者がつめかけ、正月のために特設した広い授与所では臨時の巫女五十名をも動員して応対あったがそれでもお守りや縁起物のお紅白の破魔矢、又、羊の絵馬等を求める人が殺到して息をつく暇もない程の混雑であった。毎年授与される干支の羊の一刀彫も瞬く中に品切れとなった。神門前にはコンピューターによる「交通安全神示みくじ」のコーナーが設けられた。自分の氏名、年令、性別、運転歴、体験等を基礎として申込書に記入して、即時に神断をうけるもので、全国神社でも数少い特殊なみくじで、申込者も多く、ドライバーには大好評であった。

一月一日、午前五時、総社地主祭、更に午前七時、高宮祭、第二宮、第三宮祭齋行。未だ明けきらぬ木立ちのほの暗い参道を葦津宮司以下神職、参列員が参進、古式に則り厳かな祭祀が行われた。

午前八時、総社元旦祭齋行、修祓、献饌に引続き葦津宮司の昭和五十四年の新年を寿き、皇室の安泰と国家の繁栄、氏子崇敬者の幸福を祈念する朗々たる祝詞が奉上された。

祈願殿前大駐車場は新年のお祓いをうける自動車で埋まり大晦日より夕刻まで絶えず間なく祈願の太鼓が鳴り響き、大駐車場に収容出来ない自動車は宝物館横の第二駐車場や、第二・三宮下の第三駐車場でお祓いをうけるような有様であったが、それでも、宗像署の警察官、地元消防団、学生アルバイト員等約五十名の人等の手により、実に手きわよく誘導、整理され、大きな混雑、渋滞を避ける事が出来た。

かくして、元日の参拝者は約三十万人、自動車は五万台を数えた。

二日、快晴の正月には珍らしく暖かな一日となり、午前九時、宮司以下神職員奉仕の下、御本殿に於て、産業文化振興祈願が斎行された。社頭は盛況を極め参拝者約十五万人を越え、自動車も三万台を数えた。

三日、午前九時、新春の陽光がさわやかに神域に照り映ゆる中、元始祭に併せ家内安全の祈願祭を斎行、国家繁栄の悠遠の昔を偲び、氏子崇敬者の繁栄と安全が祈念された。参拝者は前日に引き続き最高の人出で賑った。

当大社の正月は暖冬と好天候に恵まれ、年来の不況も除々に回復の兆を見せ始めた為か、清々しい注連縄飾をした新車の祓が急激に増加して来た。社頭は、晴着を着飾った若い人等の参拝が目立ち、二万本も用意した縁起物の破魔矢も三日間で品切れとなるような状態であった。

又、各官庁、国鉄、交通関係者、商店、各種団体等の安全、業務繁栄の諸祈願が続いた。かくして、今年は、宗像大社の御神威の御光と共に空前の賑いを見せ三日間の参拝者約六十万人、自動車約十万台を記録した。

―昭和五十三年度最後の恒例祭―
年越の大祓式斎行

昭和五十三年大晦日の午後五時より、当大社恒例祭の最後を飾る「年越の大祓式」の祭典が本殿神門前に於いて、葦津宮司以下全職員奉仕のもと、氏子総代崇敬者多数参列して厳粛に斎行された。

この大祓式の祭典は、その年の内に「日々生活上で知らずくに犯した諸々の罪穢を祓い除け」ると共に「一年間の無病息災・家運隆昌を神恩に感謝」して、心身共に清々しく新しい年を迎える為の祭典であります。

当大社では「この大祓式の祭典斎行に際して、十二月の初旬に郡内の氏子各位、全国各地の崇敬者五万人の方々に紅白の「人形」を配布しております。この人形に男性は白、女性は赤と氏名年令を記入していただき、息を吹きかけ人形撫でて罪穢を人形に託して返送していただいております。この返送された人形を「本人の身代り」として大祓式の神前に供え罪穢を祓い清めます。清められた人形は祭典終了後、古慣に則り玄界灘へ流棄されます。

大祓式の祭典に引続き本殿に於いて除夜祭が夕暮の中で厳そかに斎行され、ここに昭和五十三年度の総ての恒例祭が執り行なわれ数時間後には、昭和五十四年の元旦を迎えるばかりとなった。

守ろう！
「日本固有の年号」
誇ろう！
日本建国「皇紀二千六百三十九年」
目指そう！
「一世一元制度の法制化早期実現」

論説
島原叛徒の天主教信仰

数年前から何となく心引かれて、近県の旅を繰返しているうちに、島原を始め天草半戸、山陰の津和野など隠れキリシタンの遺跡に興味を感じてきた。若き盟主天草四郎時貞を擁して起った叛徒の戦力は頑強で、討伐軍は無残に敗退したことも度々であったと記録されているが、関ケ原や大坂陣の残党やその末裔の武士が捨鉢の武力を発揮した為であろう。

ここに注目すべきは、海外より布教に来た宣教師の教導により、天主教を信仰した教徒の熱烈な教団的鉄石心が戦闘力を支えた点である。

先祖祭りとか祖先崇拝教とさえ言われるわが神道と、若しくその宗教的本質を異にする天主教、しかも渡来して年数も浅く普及実績も弱く、それが意外にも一部でも狂信的団結を見た結果に世上は驚いたであろう。

伝来の歴史も古く、わが神道とは混合本地跡説に発展して種々の派生的信仰現象を将来した仏教、あるいは奈良平安の同期を通して大陸文化の影響顕著であった儒教道教陰陽道等、いずれもわが国土下の生活の中に溶け込んでいたのに比すれば、天主教は問題にならぬ度来普及の浅い歴史じか読み取れぬと考えられがちであるのに、「天にまします神」その帰依が強固な団結と戦力を加えた特色は史家の括目する処である。

修復した偉容堂々たる島原城を始め半戸城、天草各地の天主教施設には、天主教に関する資料が集収保存されている。昨今の観光ブーム客集めの手段としても、その地域の行政機関まで協力して疎かでない。隠れキリシタンの昔の摘発犯沢の処刑は、絵画に表現して悲劇の暗黒面を洗い物にした観もあるが、マリヤの隠し像、通称母子観音は仏寺の本尊拝観と同様信仰が生きている事情も残り、悪どい行き過ぎも目に付く。

さて、教祖神道は教派神道或いは神道十三派とも称し、神社が今日宗教法人の枠内に入れられて一般宗教の列に在る以前、即ち国家管理の時代には、十三派の神道は文部省の宗教部局の管理指導を受けていたのである。

従って、その期間に於ける天主教の遺跡との接触結合も少くはない。特に宗教学的考察に於いて、多神教的崇拝慣習を本旨とする一般神社の神道思想とは駆け離れた一神教的崇拝体に徹底した点が、仏教などの慈悲心の養成が隣人の不幸を救済するものでなく、自己啓蒙の活路の自覚を第三義と観る在った。天主教犠牲者の徹底した自己啓蒙に浮んだことが、宗教としての教祖神道を拡大強化させたとも言えるのである。

教祖が迫害や処罰を受けた場合を、キリスト受難の事績になぞらえ、キリスト降誕を聖母の清潔性に因ると説く教派もあって、天主教系流の思考が生きていた傾向は見逃せない。

十三派の多くは、明治維新後の新政治体勢に入って創立した。受難的成立として異色の視教は、教祖が幕府の処罰を受けたことを、キリスト受難の事績と結びつけた点と見られる点は注目に価する。

次には、天主教関係の印刷技術が長崎や平戸等の隠れキリシタンの秘密処理に遺されたのを巧みに活用した教派もあったことは、両者の暗黙の結合を解明させる。多数の宗教学者と宗教関係者が、その事績を解明しているのである。意外なところに、天主教の末流、受難キリシタンの末路が、教祖に強い示唆を与えたのである。

自由な信仰を得て、天草中心の天主教徒の末裔も性格を一変した。かつての弾圧の中に隠れキリシタンの信仰命脈を堅持した遺跡は、その子孫の生活の具に供されていると聞く。観光プームに天草の島々が便乗しないわけはない。五橋が自動車の通行を容易にし、時間のかかる船便利が減少して、各地ともパールラインの看板に派手な宣伝が見られる。

隠れキリシタンは観光客観資料を十分に残さなかったので、その末裔は少しでも信仰の匂いを持つ品々を列べ立っているようである。勿論、専門家の指導は当然遺品の陳列にも見られるが、パールラインの営業意識が強くて、処刑された先祖の幻想的ベールを剥ぐと批評する向きもある。

話は教祖神道の性格とその発展に影響を与えた天主教関係の遺跡とした。

であるが、宗教的匂いのある施設遺品美術作品等は、欧州旅行でも見聞したと同様に観光資源として取扱っている嫌味がある。信仰と観光との関連は今後ますます深くなるであろう。

阿・蒙少言

各大学の志望者中、最も目立つのが医学と歯科である。医療に対する一般の積極的熱意を汲んで、仁術の選良たらんとする者ばかりでもあるまい。学費の点入学金から他の学部とは比較にならない。医者になった後の算術に期待する向もあろう。●税制面の医師優遇が度々問題になるが、厚生省と医師会とが円満妥結の協議など、実現する筈がない。仁術にも金銭欲は喰い込む●診療費や薬代は無料になって、特に家計思恵でない老人は助かる。温泉効果を深く研究している先生は、病気に適応する泉質を求めて温泉をテめる。然し、これは近所の医院の門を潜るようにはまいらぬ●つが国の温泉数は約一万三千、火山列島だけあって、北海道から西諸島まで、温泉の湧かぬ所なしの観がある。温度・環境・泉質に治療効果がかけられるが、少くとも一週間、四五週間を適当とし、一日三回位に定めてそれ以上欲張るなら専門家が戒めている●旅費・旅館滞在費も節約型にしても相当かかるとなると、長期に頗繁とは財布が許さない。同伴者同人があって、食べ物に注文をつけば妥協でない。各温泉地に国民宿舎が出来て、庶民的になったはいえ、安い処は誰もが狙い、満員に次ぐ満員の盛況●少言子は移別に温泉好き、年中閑だからよく出かける。婆さんも孫のお守りから解放してやりたいと誘うが、三度に一度位の同伴、留守に嫁がしかろうと心遣い、よほど蟹性の星の下に生れている●中国にも温泉があるが、数は少い。山岳戦の思い出を辿ると今のベルに近い奥地の討伐、二ケ月も浴びない戦場生活の歳末に民家の温泉を見つけた。崩れかった農家が宿舎、明後日は元旦とあって餅搗き。温泉につかって星空を仰いでいると、敵襲、弾丸乱れ飛ぶ中を、裸のまゝ宿舎に逃げ帰ったことがある。（白鷺）

第三回　宗像大社歌会詠草

毎月一日／切　詠草到着順

津屋崎　永島　昭子
五十路にて移り住みたる玄海の潮鳴りひびき年は明けゆく

宗　像　片山　一
新しく塗りたる外の白壁に書かれし落書朝消さるる

宗　像　中村　幸
声もなく谷をくだりゆくは何鳥か影の束の間霧に吸はれつ

宗　像　原田まつ代
秋気曲の準備と宮に急ぎ出るを見送る如くコスモス揺れる

吉　留　高山　信子
遂くより来る老い姉さまむさ忘れ炊くぎんなん飯のみどり鮮らし

須　恵　早川　ふさ
明るく広き光のとけき相模野の冬の真陽さし浴びて行きけり

八　幡　安川　浄生
寵政の河川工事の十キロを農夫ら掘りて長の名残る

古　賀　吉武　邦夫
亡父と我時に敬しあらがいし思出なべて貧しさの故

武　丸　原田ツリノ
さけ来たり植系されしピラカンサス門より見上ぐ君にけりふを

曲　天野トモエ
宗像の変りゆく里描き残す桑野画伯の個展に見る

田　熊　久　立花　勇雄
拝殿で跪拝して戴きし元旦の神酒泌む直（ひた）きに心

田　熊　吉田　直志
幼らを寄せて作りし竹馬に乗りて見すれはよこびはしゃぐ

名古屋　野崎　傳三
火まつりの終り闌の神楽にとよみて聞ゆ鳥羽の潮騒

原　町　八波　五月
六十余年我を苦へし此の脚が軽く重たく心を映す

福　岡　吉田　信夫
無害との医師の言葉にわが作る薬は虫食へと人のよまこぶ

箱　崎　吉村　三郎
地地にと手入針を作りたる老婆の夢に枕潮らして

田　久　橋本　良輔
病みもせず野良の仕事に出はすれど老いは確かに進みつつあり

福　間　廣渡一寿軒
飛騨の里二度と来難き足跡を残して八十路の吾はたゞ行く

徳　重　石松や寿子
白鷺にまじりて遊ぶ鳥あり水ぬるみこし釣川の潮に

田　熊　今村　重刀
現身をラジオの声にたどりつつ生きゆく目の友の儚ける

鐘　崎　村田　四郎
ぼたん雪ばだれ飛ぶが田に海猫の触先に舞えり出船の朝に

田　熊　鷲津かつ代
大寒に入りて幾日かあたたかき陽ざしに映えて黄なる枯原

香　椎　桜井　ツ子
自転車の小さき荷台に載せられて百目紅の朱のふさざさ

赤　間　白木うめの
疲れは眠のわるくなる病ゞせテレビにうつる顔のほけて見ゆ

津　丸　藤田　肇
御来光浴みて吾が影長く伸び海はたてに黄金晨ゆく

福　岡　林　まつえ
空の果ち地球の果も知る居ながに八重の潮路を超え来し電波を

田　島　中野　節子
植木市幾日か続く雨の中鉢のみずきの細はえと咲く

東　郷　藤崎　辰子
日に三度冷たき酒を呑むといふ廃品を集めてながきこの人

田　熊　力丸　一郎
正月の吾が家のしきたり今もなおまもりつづくる朝の焼き餅

戸　畑　田中ハツセ
山茶花の花びら紅く散り敷きし庭掃きやらず年迎へたり

東　郷　田中　春子
親睦の膳囲むとき戦時下の辛酸のこと誰か言ひ出ず

田　久　小方　実
貧しけれど孫十七人に千円づつ贈りて春寒がんとす

池　田　永富　臻
秋あさき英彦山宮の脇路にむすびを食ふ客と吾とわが妻

武　丸　立石ろせ乃
夫の寝息がすかに次の間に聞こゆ事なく今日の一日終りぬ

津屋崎　谷口　礼子
むつきの夜紅葉狩なる一節は譽にあらしの声すなりとや

田　島　吉武　武雄
夜も更けてみぞれ降り来る離屋に腰病ち奚と春薬をはる

昭和五十四年 成人祭斎行

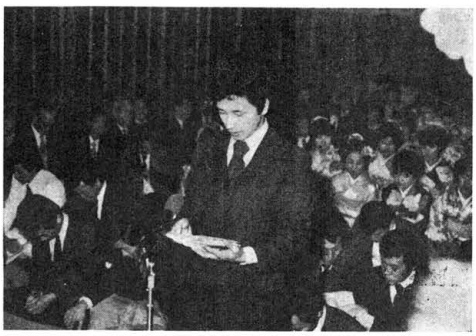
――神郡宗像の氏子青年一、六八二名 新成人として社会へ第一歩――

「成人の日」の一月十五日、宗像大社新旗殿に於いて恒例の成人祭が、玄海町の新成人二〇八名（男性一二四名・女性八四名）参列して、華やかな雰囲気の中にも厳肅裡に斎行された。

祭典は午前九時より、新成人二〇八名、玄海町々長高橋半三氏、同町議会議長白隆若氏、同町教育長田中駒雄氏、新成人父兄、宗像大社氏子会代表等、関係者多数参列の下、葦津宮司以下神職奉仕により斎行された。参列者一同清めのお祓いを受け、宮司祝詞奏上の後、新成人を代表して磯部輝美（神湊）、中野多恵子（田島）、野上薫（九州産業大学）さんが玉串奏奠を行い、代表に合わせて全員で拝礼を行った。

祈願殿での祭典終了後、全員で本殿に参拝、続いて高宮斎場前広庭に、桜の若木の記念植樹を行った。引続いて当大社清明殿大広間において、玄海町成人式々典が盛大に催された。

成人式々典では、高橋町長の挨拶、来賓祝辞の祝辞が有り、新成人を代表して、三好康之（神湊）さんが「今日からは公私共に一人前の社会人として、言動に自覚と責任を持ち真の民主的な国家社会に貢献できる人格の形成に努め、如何なる困難にも打ち克つ勇気と相互に理解協力できる豊かな人間性と一同熱心に聴講、式次第も遅滞なく了え、新成人一人一人が社会人としての感銘を胸に正后過には、宗像大社御社頭より門出したのであった。



本年の成人式当日は暑り空で肌寒い天候であったが、成人式を迎え若人達は早朝より、三々五々晴着姿で境内に参集して、旧交知己を温め写真撮影に談笑に花を咲かせる風景が随所に見られた。今年の新成人・女四五九名、津屋崎町二七名（男一〇八・女一〇九名）、福間町三一九名（男一七六・女一五三名）、玄海町二〇八名（男二四・女八四名）の計一六四九名（男八四四・女八〇五名）が晴れて成人を迎えた。尚、大鳥村の成人式は昨年迄は数年毎に行っていたが、本年度より満年令で行うことが決った関係で、昨年成人式を行った三十三名が今年の成人となるので中止となっている。

――◇――

今度、目出度く成人式を迎えられました郡内氏子青年の皆様方へ、本誌上を以ってのかの御祝詞を申し上げますと共に、今後は一社会人として、清く・明るく・正しい人間性を持って長い人生の旅路に精励され、幸多からんことを祈念申し上げます。

昭和五十四年一月吉日

社報「宗像」編集部一同

献米奉告祭斎行

――祭典後・鏡餅開き盛大に斎行――

新春の去る正月十三日午前十一時より、恒例の献米奉告祭が斎行され、祭典終了後参列者一同出席して鏡餅開き式が盛大に執り行なわれた。

この献米奉告祭は、旧年末に宗像郡内一円の氏子中から奉納された新穀を、初春の神前に供えて五穀豊穣を神恩に感謝すると共に新年の豊作と無病息災を祈念する大事な祭りであります。

本年は正月元旦より近年にない温暖な日々が続いていたが、献米奉告祭当日は春一番が吹き荒ぶ大変寒い中での祭典斎行となった。定刻、葦津宮司以下本神職奉仕のもと、中村清之氏子会を始め評議員、各地区氏子総代、篤信者並に一般参拝者等多数参列して厳粛裡に執り行なわれた。

祭典は、神前大床に積み上げられた〝カマス〟詰の新穀、献品された鏡餅、酒等のお祓いの後、葦津宮司の祝詞奏上に続き郡内氏子代表の氏子奉幣使による奉幣献詞が奏上され玉串奉奠の後、氏子総代、永年勤続者表彰式が行なわれ、宮司より各表彰者に感謝状並に記念品が贈呈され祭典を終了した。

引続き斎館直会開場に於いて、鏡餅開き式が盛大に執り行なわれた。新米で作られた一、〇〇〇個の餅が「雑煮」や「汁粉」として出され、参列者一同舌づみを打ちながら会食を行い、今年一年間の無病息災・家内安全を念じつつ、楽しく和やかな一時を春の御社頭で過した。

尚、奉納された新穀はこの一年間、当大社で毎朝の日供祭神饌として神前に献じ供えされ、氏子の安全と弥栄が祈念されます。

――◇――

本年度氏子奉幣使並に永年勤続表彰者芳名は左記の方々であります。　敬称略

記

氏子奉幣使

占部　真太郎（津屋崎町）
沖西　彰（大島村）
小畑　初雄（玄海町吉田）
宿　太郎（〃　田島）
黒石　雅資（〃　江口）
安部　正義（〃　池野）
尾島　肇（津屋崎町勝浦）

以上

神湊「お日待」

―伝統ある庶民の神人和合の神事―

昭和五十四年の新春を迎えた、玄海町神湊の三区内（下東・上中・段天各区）十四組の住民による「お日待祭」の神事が、松の内の五・七日の両日に斎行された。

この「お日待」の神事は、近隣で組伴間を作り、ある特定の日（陰暦の一・五・九月の吉日）に仲間内（組内）の当番の家に寄り集まって心身を潔め、床の間に「神様」を奉斎して、一夜を眠らないでお籠りを行い、翌早朝の「日の出」を一同で拝み、神前に於いて「お座」をして解散する庶民の神人和合の神事である。

「待」はマチと訓み、このマチは古語でマツリと同義であり、「神の傍にいてともに夜を明かす」という意味であった。しかし後に、それは「日」や「月」の出るのを「待つ」ことだと考えられるようになって、今日では「お日待」（おひまち）として、各地に於いて執り行なわれているが、昔にくらべこの神事も時代の推移と共にいろ〳〵な拘束がともない、特殊な神事となり当地方に於いても今日なお続いている処は数少なくなっている。

今年の神湊各区隣組の「お日待」は、天候に恵まれ近年になく盛会厳肅裡に執り行なわれた。各隣組に於いては、前日より当番の家に集まり各役割を決め、祭壇の清め、物品調達、料理等諸準方端整夕刻より心身を潔め、お祓に入った、翌早朝の「日の出」を拝し、当天社より出向した神職が祭典を執り行い、祝詞奏上の後、組長、当番が玉串拝礼を行い、今年一年間の組内の〝災難消除・無病息災〟を祈念し、手造の料理を囲み和やかな直会に移った。この直会には必らず「青魚」（イワシ又はサバ）が付けられているが、そのいわれは定かではない。その他は各組趣好をこらした料理が出される。

蓮根の蒲焼

十甫の丑の日を最高の厄日とする鰻の話ではない。六月頃の開花期に暫時掘っらで、年中掘り取る蓮根の料理について愛知県農村研究を拾い上げる。

全国の蓮根収獲量の一割以上を生産するこの僻地、過疎の痛手はご多聞に漏れないが、正当派の老人や勤労派の青壮年は、浮世床にどっかを巻いて無駄話にのほせる暇などはない。掘る、洗う、加工、発送と泥田の生産に終日駆使される。それに堪え得ぬ若者は名古屋に去ると言うのに、町の銀行に勤める娘が蓮根掘りに情熱を燃やして嫁にきたと語るのも居る。

弘法以来、僧侶が広い世間を見た目を荒地の開発に向けた例は少くない。農業生産として誇る蓮根も「食を愛すべし」の自家食用として始めた歴史がある。「風眼を以って観ること勿れ」の神門諸役の生産指導は、どこでも厳しかった。それがいつか自家食用の域を脱して、生活上欠かせぬ役割を負うとうとまで仲張したのである。

難しい神談義は、蓮根にとってはどっでもよし。蓮根農家の主婦連中が毎月定めた日に、手造りの料理を持ちよってお互に試食を楽しむ習慣が始まった。いよいよ蓮根料理の核心に入る。

黒考の変化が、思想の改革を呼び、嗜好の愉悦を知る。重箱やタッパーが列ぶ賑やかな談笑も起る。婦人ばかりで男性の姿はない。王天改良の異色が、遂に蓮根の蒲焼と称する珍中の珍とはなった。みごとに鰻に似た蒲焼の重詰めに、興味の瞳が伸びる。

これを造った主婦の弁に、苦心の跡が見られる。黒琴大根蒟蒻昆布と一しょに煮付けたるが、一般家庭の鉢物、これは現代の肉類魚介の油使用の料理を好む若い連中が相手にしない。そこで鰻の蒲焼に似た油使用の蓮根の蒲焼となったである。海苔までかぶせた念の入れかたに、細心の工夫が見られるが、若い連中もよく食べるそうである。このインチキ・カバヤキは鰻以上の妙味かも知れない。重箱は忽ち空になるほど好評であった。

小さく刻んだ蓮根は、鶏肉牛豚百人分以上は売れるも造らねそば菓子に会ったのは印象的であった。金もうけの商売を離れた職人気質の意地が光っている。

「うちはそばこっち、酒が飲みたかったらよそへ行ってくれ」とそば注文にビールを追加したら、剣もほろろにやられた。派手にそば菓子を売る構えの店舗でない「本日分は売り切れました」とひと事のように言ってのける。

「食を愛すべし、風情を以って食うこと勿れ」の商法は厳しい。観光僧の金儲け本位の応対よりも、極楽道の妙諦に適っている。信州と、面白くも感じている。

残筆しがらみ草紙 (26)

玄陽隠士

の代役もつとめるようになると、出稼ぎの都会ではとても口に入らない故郷の魅力である。更に工夫を重ねて、やがて広く普及するとが望まれる。

宗門が山村住民の生活に教えたものに、そばも有りである。信州や仙台の旅行に、風変りのそば屋

運根もそばも素朴な風味がわかる国民性に合って、親しまれてきたが、古典に載っているか否か知らない。中国大陸から渡来したのであろう。中国大陸と運根、戦時中の想い出が浮ぶ。

ある占領地域の農村の警備に従っている頃、勤務のない関東兵隊達で運根掘の掃湯作戦が始められた。山砲の弾丸装展のように簡単に要領よく片付けるわけにはゆかない。褌一貫に撥鉢巻、構えはよくても戦果は容易にあがらない。兵隊の一人は近くの部落に飛んで、農民数名を連れて来た。彼等は土掘りの道具を持っていた。

能率はあがった。夕陽傾いて暑い南国の空に微風の涼味を感ずる頃、疲労も加わっていた。顔を出した別の兵隊に、班長は何ごとかを命じた。恐らくチャンチューを買わせたに違いない。

蒲焼にはならなかったが刻んだ煮付け、味は上等、風味豊か。「みんな、穴掘りは上手になったな、オレがやられた墓穴は頼むぞ」と、酔がまわってロレツが怪しくなってきた。棚の上には昼布で包んだ戦友の骨箱が安置されていたからである。

遺骨といっても、名前の当人のものかどうかわからない。討伐行で峻しい山頂の銃撃戦で斃れる、小指だけ切り取って駐屯地に帰ってくる。そして合同祭場から骨片の分配となる。蒲焼の話とは甚だ縁遠い抹香臭い結末となった。

こうのかなと湊神 (84)

楠早鳥作
福田長庵画

四塚（その三）

医師を見送ってその場に立ちつくしている明継の背后に人の気配がした。振りむくとるいが立っている。〈病はやはり思わしくないのか〉と問いかけるのに黙然とうなづいた。続けて今すぼるを救えるのは大内館に滞在する明の医者だけだと告げた。それを聞くとるいは小走に夫のもとへ行った。

今から大内館へ行き医師を迎えてくると言いおいて大股で外に出た明継の背后に、人の気配がした。振りむくとるいが立っている。〈病はやはり思わしくないのか〉と問いかけるのに黙然とうなづいた。続けて今すぼるを救えるのは大内館に滞在する明の医者だけだと告げた。それを聞くとるいは小走に夫のもとへ行った。

頬を紅潮させた照亮が出てきて、今から大内館へ行き医師を迎えてくると言いおいて大股で外に出た照亮がどう話をつけたのか、一刻ほどたって陳喜が興に乗り従者に薬箱をもたせて現れた。色が白く二重顎で自ずから大人の風を備えた人物である。明継が出迎え、先ず賓客を遇する挨拶をしようとすると、大きく手を振り、華語で病室へ通せと言う。先に立ち案内すると陳喜の顔にいぶかし気な色が走った。

病人への質問も応答もすべて明継が通訳をした。それを横で聞いている照亮もゐも改めて明継が異邦人であるということを認識し、今までそれを忘れていたという事実に驚いた。一通り診察をおえて、陳喜は薬の調合をはじめ時々手を休めては明継に病状を説明した。心労で身体が衰弱しているところに風邪をひき、高熱を発したのだと言う。帰国は無理かと尋ねると首を横にふった。その様子を見上げていたすぼるが病人の直感でわかるのか心何とか国に帰れるように頼んでくれ〉と訴える。明継がありのままを陳喜に告げると〈この薬を二・三日のめば熱も下がり気分もよくなる、その頃、凪を見はからって船に〉帰るならよかろう〉と答えがきた。すぼるに通訳をすると安堵したように目をつむった。

この頃の中国の医学をみると、いずれの民族でも同じであるが医療技術は、しばしば神人によって発明されたと言われる。中国では太古の昔、神農氏が百草を試みて薬物としての効能を知ったのがその起りであると言われ、薬草としてあがめられている。もとより神農氏は伝説上の人物であり、中国に於ける薬物の知識は経験によって蓄積せられたのである。秦より漢におよぶ時代は、方士が老不死の薬を求めて活躍したこともあって一段とこの知識は増大した。

中国では薬物のことを本草と呼んでいるが、薬物の主体が植物性のものであったからこの名前が出来たらしい。この薬物学に対して、医学としては、漢代に「傷寒論」と「黄帝内経」という本があらわされている。傷寒論は後漢の頃、張仲景という人物によって編纂されたもので、彼は高級官僚であったが、当時高熱を伴う流行病がまんえんして数百人にのぼる一族が死んだための書物をつくったと言われている。張仲景は医師の出身ではなく、専門家の意見を聞いてこれを集大成したものである。この傷寒論は、金、元のころ

が国にも影響し江戸時代には医師の必読書となったほどである。脈による病状の診断を中心として、病気を治療するための処方が示され、これらの処方は単に熱性流行病に役立つだけでなく一般の病気にも効果があった。また黄帝内経は、素問と霊枢の二経から成り立って霊枢は針灸術を述べ、素問は中国医書としては珍らしく、人体の生理、病理を説いている。そこには中国人の宇宙観を反映し、天地という大宇宙に対して、人間はその写しであるとし、大宇宙が陰陽の和気から成り立っているように、人間もこの陰陽の気をうけて生存するとき、この調和が乱れれば病気が起ると言うのが素問の病理説である。中国の医学はこの二冊の本から発展してくるのであるが科学的なものを主体とし外科に欠けているのが大きい欠点である。また元時代に入るとイスラム文化圏との接触によりイスラム系の医療が伝ってきている。陳喜もこの最新の治療法を学んだ医師の一人であったろう。

診療をおえた陳喜を別室に案内し礼を述べると、人貴公の噂に聞いた張子誠の遺児か、かって趙峡という僧から話を聞いたことがあるので一度会いたいと思っていたところだ〉と興奮して話かけその后の明国の政情について語った。話が一段落したところで改めて病・四塚の山々に囲れた里こそ、すぼるの終の住処かと思うと胸の底から涙がこみあげてきた。

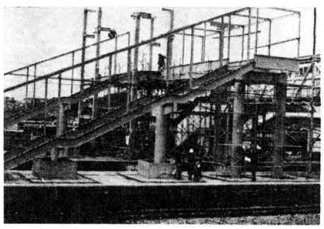
×　×

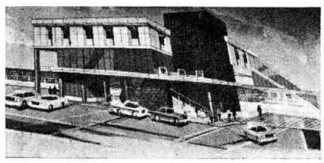
×　×

国鉄「東郷駅」改築工事始る

――昭和五十四年十一月竣工落成を目指して――

大正時代より宗像郡民の鉄道交通の利便に寄与し親まれてきた、国鉄鹿児島本線「東郷駅」（駅長芳田晶吉氏以下職員十七名）の駅舎改築が決定、昨年夏頃から事前工事として駅構内の電気系統の移転工事が行なわれ、同十二月初旬より基礎工事に着手、新年早々には駅舎本体の鉄骨が組み立てられていよいよ工事も本格化、本年十一月の竣工落成を目指して着々と進行している。





新駅舎は、昨年十一月二日に新設開業した東福間駅と同じ横上式を採用して、現駅舎の赤間駅側に建設される。

新駅舎の概要は、駅舎本体が鉄骨三階建、延べ面積六三〇㎡で、一・二階は小荷物受付、電気系統を始め各種関連機器を収容、三階が駅事務室・改札口・コンコース（待合室兼通路）となる。駅前広場は東郷側が現駅舎を解体整地して現在の広場と併せ約二倍の広さとなる。工費は二億四〇〇〇万円を見込、国鉄の方針で半額が地元利益者負担となっている。

この外に国鉄独自の事業として工費約一億円をかけて、上下各ホームの上屋の建設工事が実施される。第一期工事として三月末迄に上下各ホームに五〇mの上屋を設置、駅舎完成の十一月迄には延長一〇〇mが完成する。

新駅舎が完成する十一月には、面目一新した近代的な「東郷駅」となる。現駅舎正面に完成予想立体図が掲示されており、利用客はこの図面と日々進行する建設工事状況を見て「立派な駅が出来、いままでの不便も解消され周辺地区の発展も益々進む」と喜んでいる。

現駅舎は大正二年に建てられた木造平屋で六十五年余の永い間、郡民の通勤通学・旅立の玄関口として親しまれてきたが、老朽化と年々増加する利用客に対応出来なくなり各方面から早期駅舎改築の声が高まってきた。

特にここ二〇年来、同駅を中心として周辺の宅地開発が進み、昭和四十六年七月には山手側に西日本でも最大級の住宅公団日の里団地が完成、その他大小の団地が続々と建設され、同駅を利用する乗客は玄海町住民を含めて一日約一万二〇〇〇人にふくれ上り、実に一〇年前の一〇倍近くに達している。この為朝夕のラッシュ時には上下各二五〇mのホームは人波で溢れ、雨天の時には待合所は狭くホーム上屋も狭く傘をさして電車を待つという状態である。

同駅を利用するには、日の里団地側からは陸橋を昇降して東郷側に出て改札を行い、東郷側からは駅前広場が狭くバス乗入も不可能で、旧国道三号線東郷駅前口バス停より駅まで約一km歩くという不便さで、利用者から一日も早く駅舎並に駅前広場の改修が望まれていた。

新春の御社頭で

第二十二回 宗像マラソン大会
第二十四回 玄海町駅伝大会 開催

第二十二回 宗像マラソン大会

――一〇キロの部・佐藤弘幸選手
二キロ女子の部・谷口律子選手 優勝――

第二十二回宗像マラソン大会（主催＝宗像体育協会・西日本新聞社、主管＝郡陸上競技会、後援＝宗像大社・郡中体連）が一月二十一日（日曜日）、新春の参拝者で賑う当大社御社頭に於いて盛大に開催された。

第二十二回大会には郡内はもとより福岡・北九州市を始め遠方から昨年を一〇〇余名上回る四五〇余名が参加、宗像大社～江口間の折返しコースに三種目六クラスの各部にエントリーで〝時間と身心の限界に挑戦〟する白熱したレースを展開、好記録が続出した。

大会は定刻の午前十時に全参加選手、大会関係者が当大社本殿前に集合、神前に無事故安全と大会の隆昌を祈念する祭典を行い、選手代表の力強い宣誓の詞があり、同十時五十分号砲を合図に郡内青年の部（五キロ）からスタート、中学の部、高校の部、一〇キロの部、一般学生の部、女子の部と順次スタートして、各選手力の限り健脚を競い、沿道から地元の人達を始め通行する車両からも盛んな声援を受け、ゴールの御社頭では待ちうけていた参拝者から盛大な拍手をもって迎えられた。

大会終了後、御社頭に於いて表彰式が行なわれ、各部毎六位迄の入賞者に賞状、トロフィー、記念品が贈られた、特に女子の部で中学一年生ながら先輩を抜き、大会新記録で見事優勝した谷口律子嬢（中央中）には一きわ盛大な拍手が起りその栄誉を祝福された。

この宗像マラソン大会は福岡県のマラソン界では、最も歴史が古く、由緒ある大会である。特に高校の長距離選手はこの大会に出場することによって、自信を深め以後の競技に役立っている。又広く門戸を開き郡内選手だけでなく県内からの参加も認め、女子の部も行なうなど斯界の発展に寄与し年々盛大に開催されている。

第二十二回大会の成績は次の通りです

【二キロの部（女子の部）】（敬称略）

優勝 谷口律子（宗像・中央中）
二位 井村綾子（筑紫女学園）
三位 樋口明世（〃）
七分三〇秒

【五キロの部】

（中学生の部）
優勝 木下哲彦（緑ケ丘中）
二位 松尾賀司（霧ケ丘中）
三位 正木盟（〃）
一六分五七秒

（高校の部）
優勝 阿部俊介（八幡大附属）
二位 桜井正博（〃）
一五分三五秒
三位 鵜島研介（宗像高校）
一五分四四秒
一五分五〇秒

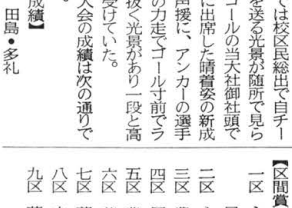
（一般学生の部）
優勝 白木邦弘（宗像町）
二位 才所道弘（広川町）
三位 野村誠（八幡大学）
一五分二五秒
一五分五一秒
一六分〇三秒

（郡内青年の部）
優勝 北島博之（福間町）
二位 城戸弘昭（〃）
三位 御堂輝昭（津屋崎町）
一六分〇〇秒
一六分〇九秒
一六分三七秒

【一〇キロの部】
優勝 佐藤弘幸（北九州・黒崎窯業）
二位 小山治（大濠高校）
三位 天津正孝（黒崎窯業）
三〇分二一秒五
三一分〇八秒
三一分一〇秒
以上

第二十四回 玄海町駅伝大会

――田島・多礼チーム二連勝――



第二十四回玄海町駅伝大会が「成人の日」の一月十五日、当大社御社頭をゴールに、同町内各校区・職場団体等十五チームが参加して、町内一周の二五・七キロメートル、九区間に熱戦を展開した。

大会は高橋半三町長の号砲を合図に、出発地点の福田バス停前を十五チーム一斉にスタート。一区では各チーム実力者を配置、白熱したレース展開となった。三区に於いて江口・神原チームが豊福秀人選手の七人抜により一躍トップになったが、四区から昨年度優勝チームの田島・多礼が除々に実力を発揮し、四区間でトップをとり二位の江口・神原チームに一分四三秒の差をつけ堂々と二連勝を果した。

大会当日は春一番を思わせるあいにくの悪天候であったが、各選手は力の限りを尽くして力走、コース沿線では校区民総出で自チームに声援を送る光景が随所で見られた、又ゴールの当大社御社頭では成人式に出席した晴着姿の新成人多数の声援に、アンカーの選手は尚一層の力走でゴール寸前でライバルを抜く光景があり一段と高い拍手を受けていた。

尚、今大会の成績は次の通りであります。

【チーム成績】

優勝 田島・多礼 一・三二一・四三秒
二位 江口・神原 一・三四・二六秒
三位 田野A 一・三六・〇三秒

特別賞（殿進賞）
上八・祓川（昨年度十位）

【区間賞】
一区 永島祐一（上中）
二区 永島光洋（上中）
三区 豊福秀人（江口）
四区 田中完積（多礼）
五区 豊福淳二（江口）
六区 荒川日出男（段天）
七区 花田裕治（田島）
八区 力並保夫（〃）
九区 花田睦明（〃）
以上

昭和五十四年 宗像大社歌会 新年「互選会」始め

昭和五十四年新春を迎え、善男善女の参拝者で賑う御社頭に於いて、恒例の宗像大社歌会「新年互選会始め」の祭典が二十日午前十時より、会員多数参列のもと厳粛盛会裡に斎行された。

この互選会始めの神事は、宗像大社歌会々員が毎月一回宗像大社に相集い、会員相互で作品の批評並に斯道の研修を行い、会の名称を「互選会」と定め開催し、その年の年頭には、会の隆昌と会員一同の無病息災を祈念する為、当大社御社頭に相集い参拝祈願している。又、年頭の互選会に於いては、前年度の反省と、新年度の運営方針が話し合われている。

本年度、互選会始めは、当日午前十時より祈願殿斎場に於いて、宗像大社歌会副会長吉武武雄氏、同歌会講師代理田村五郎氏をはじめ会員四十余名参列のもと斎行され、会を代表して吉武副会長、中村講師代理の両氏が玉串奉奠を行った。

祭典終了後、引続き宗像大社斎館に於いて、新年第一回目の互選会が中村講師代理指導のもとに催された。新年第一作とあって会員各自提出の作品は秀作揃いで、講師の講評も良く、会員一同大張きりであった。

互選会終了後、別室に於いて宗像名物〝かしわのスキ焼〟を囲み新年宴会が催され、会員一同、新年の抱負を語り合い、飛入の歌謡曲まで披露され、新春の陽光のもとタ刻まで和気合々に繰りひろげられた。

昭和五十四年度 第一回 宗像大社菊花会 役員会並総会開催

宗像大社菊花会（主催＝宗像大社菊花会、後援＝福岡県・門司鉄道管理局・福岡県農協中央会・福岡県観光連盟・宗像農協）は全国の菊花愛好家の注目を集めて無事成功裡に昨年十一月末日終了した。

この大会の主催団体である宗像大社菊花会は去る一月二十八日午前十時から前年度大会の反省会をかねた本年度第一回目の役員会を当社宿衛舎に於いて開催した。

当日は高原会長以下西日本各地の菊花会から選出された役員五十一名と神社側から楠本祢宜以下一名が出席、定刻通り開始され、まづ楠本祢宜、高原会長の挨拶がなされた。

議題審議に入る前に定期役員改選の審議がなされたが、現会長以下三役の信任厚く再度留任が決定し、結成十周年記念大会まで現在の陣容で臨むことになった。

引続き高島理事長の議事進行により昨年度の反省と本年度の方針について審議された。

決定した主な事項は次の通りである。

○福助・切花の出品規格を全日本菊花連盟全国大会出品規格に改正する。
・福助作りは鉢底より花首まで四〇㎝以内とする。
・福助作りは五号鉢とし、菊鉢ダオン素焼の何れでもよい。
・切花の茎長は花首下五〇㎝とする。
・切花、福助作りの添竹（但し竹に限らない）は、黒色とし必ず輪台を使用のこと。
○何れの出品物も出品規格にはずれたものは審査しない。
○審査当日の審査打合せ会には会長・理事長・事務長の三者が出席する。
○花壇の増設はしない。
○大会日程決定
・搬入 十月二十八日
・開会式 十一月一日
・審査 十一月一日
・会期 十一月一日～十一月二十四
・表彰式 十一月十八日
・搬出 十一月二十五日

○本年に限り全菊連規約に準じて切花・福助・盆栽・一鉢出品の特別花壇を設置する。
○本菊会役員は全員全菊連に入会すること。又会員にも呼びかけ多数の入会を希望する。
○三月十一日午後一時第八回西日本菊大会大臣賞受賞者草川己之助氏・同大会最優秀模範作品賞受賞者高島茂人氏により小菊盆栽の講習会を開催する。
○本年度の競技花は「国華風林」（菊・早・中）なら決定した。

その他、細部に亘っては多々変更があったが、大要は昨年とさほど変っていない。

役員会終了後同所に於いて総会懇親会が開催され、地元会員を始め多数の会員が参加出席し盛大裡に無事終了し午後四時すぎ散会した。

昭和五十四年度 新役員名簿（敬称略）

名誉会長 葦津嘉之 宗像大社
顧問 樋口芳郎 宗像郡
会長 高原鹿吉 粕屋郡
副会長 伊藤富夫 飯塚市
〃 駒山直次 門司区
〃 高田太助 八幡西区
〃 古屋謙助 福岡市
〃 大平喜代松 佐世保市
〃 橋口武夫 武雄市
〃 行藤輝臣 熊本市
〃 古谷静次 小野田市
〃 久田益三 大分市
〃 高島茂人 遠賀郡
〃 楠本正 宗像大社
〃 竹内豊 小倉南区
〃 俣野辰雄 戸畑区
〃 古波蔵正忠 八幡西区
〃 森田長命 直方市
〃 小沢新助 宗像郡
〃 平野直義 若松区
〃 篠原久雄 宗像郡
〃 黒岩九州男 三井郡
〃 佐野功 門司区

理事
池上福元 門司区
伊達学 若松区
安永秀喜 飯塚市
石坂寿英 飯塚市
伊藤隆男 若松区
大森忠夫 若松区
塩川辰雄 八幡西区
松岡勝美 戸畑区
三浦常男 戸畑区
木瀬秀哉 八幡西区
武藤強 八幡西区
西宏 八幡西区
吳屋太郎 小倉南区
坂井倬末 小倉北区
吉田透 遠賀郡
千々和正信 八幡西区
吉田耳 宗像郡
内藤熊雄 宗像郡
高橋民夫 宗像郡
楠理 宗像郡
西口三吉 宗像郡
中野真 粕屋郡
長崎弥太郎 粕屋郡
水田純子 久留米市
松永伝栄 武雄市
時田巍光 島根市
岡崎常雄 熊本市
浜田三郎 佐世保市
横道藤人 佐世保市
井川晴巳 佐世保市
志岐公平 佐世保市
馬場正晴 佐世保市
岡村弘 三井郡
西河貞男 直方市
野上一実 田川市
堤宏 宗像大社

運営理事
杉下松雄 小倉北区
柏木幹次郎 八幡西区
川崎正木 嘉穂郡
溝口勇三 佐世保市
山口初美 佐世保市
青谷貞五郎 粕屋郡
坂本寿一 武雄市
蔵田協 八幡西区
堀尾米吉 熊本市
清水金作 宇部市
海藤義太郎 春日市
木村平八郎 小倉
池上福元 門司区
伊達学 若松区
安永秀喜 飯塚市
石坂寿英 飯塚市
伊藤隆男 若松区
大森忠夫 若松区
塩川辰雄 八幡西区
松岡勝美 戸畑区
三浦常男 戸畑区
木瀬秀哉 八幡西区
武藤強 八幡西区
西宏 八幡西区
吳屋太郎 小倉南区
坂井倬末 小倉北区
吉田透 遠賀郡
千々和正信 八幡西区
吉田耳 宗像郡
内藤熊雄 宗像郡
高橋民夫 宗像郡
楠理 宗像郡
西口三吉 宗像郡
中野真 粕屋郡
長崎弥太郎 粕屋郡
水田純子 久留米市
松永伝栄 武雄市
時田巍光 島根市
岡崎常雄 熊本市
浜田三郎 佐世保市
横道藤人 佐世保市
井川晴巳 佐世保市
志岐公平 佐世保市
馬場正晴 佐世保市
岡村弘 三井郡
西河貞男 直方市
野上一実 田川市
堤宏 宗像大社
〃 〃 〃
川井田盛子 〃

宗像大社歌会 俳句作品集（九三）

福岡　入江　文子

四方の神住居に入れて初御空

名古屋　野崎　傳三

あかつきの圧を越え来る初神楽

藤沢　玄洋子

大鳥居雪空衝いて辺津の森

土穴　八尋　恒夫

喜寿過ぎておそうに餅も十二三

津屋崎　井浦　良介

東の間の蓬瀬に映ゆる福寿草

福間　広渡一寿軒

松喰いの枯木の浜に陽は沈む

田熊　力丸　一郎

若水に老い吾ンミがまた一つ

田熊　安部　ゆき

老姉訪ふ宗至を携り合ふつめたさよ

福岡　力丸ゆずる

足るを知る心きわめて古稀の春

田島　吉武　武雄

遅しき馬乗り入るる春の川

浜の寄物

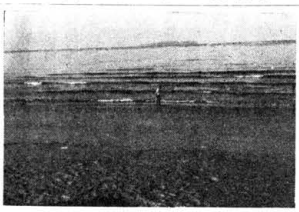
貝寄せ風　(2)

いしいただし

（七～六）

福岡県産貝類目録（一九六九年発行・高橋五郎・岡本正豊）・福岡県産貝類目録訂補資料（一九七七年岡本正豊）とを見れば、福岡県の貝の分布と種類をほぼ知ることができる。それにこれれば、玄界灘岸で宗像郡津屋崎付近の浜は打上貝の種類が、本県中もっとも豊富で約四百種に及ぶという。そのために海岸を歩くコレクターは多い。

もう数年前になるが、年もおしつまった冬の寒い日であった。津屋崎の浜を親子四人がバケツを持って歩いていた。今頃なんだろうと思い近寄って、バケツの中をのぞいたら、バケツの中は貝殻がいっぱい入っていた。理由を聞くと貝の豊富な津屋崎へ、山口県徳地から来た医師福田敏一氏の一家であった。折角だったので、私の採集した貝を見てもらうために家へ寄ってもらった。当時小学校三年の福田氏の長男宏一君は、どんな貝でも名をあて、一つ一つの貝について詳しく知っていて、しかもほとんどの漢字を読める天才的な少年で大変驚いたのである。この一家は今も休みになれば、貝を求めて西へ東へと採集の旅に出られその活躍ぶりを貝類雑誌に掲載している。寒風吹きすさぶなか、親子で趣味に打ち込んでおられる姿



いい一家の姿に、私は深い感動を覚えたのである。冬がくる度に、あの親子の姿をいつも思い出す。

津屋崎の渡半島部は環境のよさもあって、療養所や病院が多くあるが、そこに入院している患者にたまれて、毎朝・津屋崎から福間浜にかけて、貝殻を拾っている人を数年前までよく見かけた。集められた貝殻で貝細工が作られるのである。

海岸そして果しなくひろがる海、貝や魚、そして石や流木に風味をもつもの、一日一度は海を見なければ気のすまないもの等、さまざまな形で海との接触があり対話がある。生活もあれば、趣味、研究、そして心の安らぎもあるが、四面環海、海に囲まれた日本の一つの姿であろう。

ビン　(1)

今年の正月一週間は漂着物が多かった。一月二日に果から帰ってすぐに福間花見浜へ出てみた。苅目川口近くの満潮線付近で、ソデイカが口近ひあがっていた。全長二十九センチの稚イカであるこのイカの標本が欲しかったので早速ホルマリンに漬けた。同浜で海藻に巻きついた数本の藤も採集した。

三日には津屋崎浜で漂流中のウスバハギ（全長四七、五センチ）を拾った。花見浜ではムラサキダコ一匹漂着していた。

六日の朝には、津屋崎町京泊に住む花田市右エ門さんから「うちの前の浜にウミボーズがあがっとりますバイ」という電話をもらった。甲長九十七センチのアカウミガメであった。

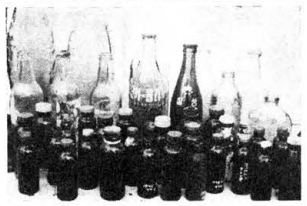
七日、海の中道を歩いたが、ココヤシ等の南方果実数個のほか、船玉様入れを拾った。

八日、午後から白石浜を歩き、ココヤシ・藤を採集・夕方には古賀花見の中川付近で、全長九十センチのイルカ（子供のイルカ）の死骸が漂着しているのを見つけ、標本のため頭部を切断してきた。

十四日、津屋崎勝浦浜から宮海町鐘崎浜まで歩き、ココヤシ六個ほか多数の藤。それに今迄一度も漂着がなかった新種、長さ八センチのもので、一見マンゴーのような形種子を一個採集した。

以上、新春早々、亀の漂着もあり、漂着によい年であればよいが―

さて漂着するガラスビンについて述べてみたい。最近はビニールやプラスチック類が多くなって、ガラスビンは減少しているように感じられる。七十四年、海の中道（雁の巣から塩屋鼻間）で漂着もビンを数えてみたところ、七七一本あった。五年後の七十九年・同じ場所で調べたら三八五本であった。それに代ってジュースやビールの缶・プラスチック製品の漂着が多い。



漂着するビンの多くは日本製でしかも酒ビンが多い。なかでも洋酒、次いで疲労回復などのドリンクビンである。日本以外のものは韓国製が多く、一升ビンから九センチほどの小さなものまでありその用途も、酒・薬・醤油等である。韓国製ビンの栓も、最近は金具を使用したネジ式のものが見られはじめたが、それまではプラスチックの蓋か、コルクの栓をしたものが大部分で、ビンを見ただけで日本製と区別ができた。それに韓国製ビンは、気泡があり、ビンの厚さも一定せず、薄いところや厚いところがあって、技術的には稚拙で、それだけに素朴で面白いものが多い。

ビンについては七四年三月に、野島研究家の城野茂門先生と、白石浜から勝浦浜を歩いた時に、勝浦に漂着したビンに大変興味を持たれた。三角形の酒ビンで、ロシア文字のラベルが付き、なかなか酒落たものである。先生はこれを契機にガラスビンを集められているが、「ガラスビンはなんぞ」という訳ではなく、集められるビンの基準があって、①一〇～一五センチ前後の小ビン、②手造りの素朴さ、③栓はコルク式のもの等である。私も流れついたものや、道端で拾ったものを時折り持って行くが、もうかなりの数を集められている。

海岸歩きも一人で歩くと、何の気兼もなく、自由気ままに歩くことができるが、時には分野別目的の違う人を同行すると、色々な見方や考え方があって、教えられることも多い。先述した城野先生も歩いて、海鳥のみならず、浜に寄る自然の中で、その妖しい光りを楽しむ気持がほしいものである。

鐘崎民俗誌　その十

楠本　記

鯛の地漕網

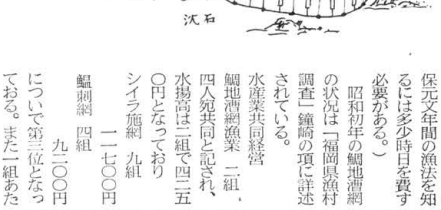
享保十七年（一七三二）鐘崎の権田六右衛門という人が、時の藩主まり鯛網の一手営業を許されたことが筑豊沿海誌に載されている。興味をもって、立春もすぎた一日、宗岡宗一さん（明治三十二年生）を訪れた。

「あ、鯛の地漕網ですか、あれは十四・五年ほど前までやっていましたが、今は誰もやっていません。」

と陽光にきらめく玄界灘を目を細めて眺めながら語っていただいた。地漕網は細長い帯のような形で舟一艘が沖から地に向けて漕ぎます。網にはダラの木で作ったブリ木をつけ、それが海の中でゆれ動いて鯛を追いこむわけです。ダラの木は、色が黄色っぽかの木のように水に漬けても黒くならないので用います。

舟は網をひく舟が二艘と網が瀬にかかった時におす舟が六艘で全部で八艘でやっていました。何分にも人手がいりますので、一組を四軒でやっていましたところから四共と呼んでいました。大正八年私が兵隊からもどった時も盛にやっていました。地漕網でいちばん獲った思い出は、こんどの戦争中に還暦の方の応備から魚を頼まれ、地ノ島と大島の間から網を引き脇浦浜にあった時です。そのときばかりは、海にはこんなに魚がおるものかと思うほどの大漁でした。この間に中どり（神どり）の網を作るため、糸島の西ノ浦から師匠を呼んでやりましたが、この網はとれる時がはっと獲れましたが潮が悪いとなかなか入りませんのでも、しばらくしてやめました。」

この話を聞いて玄界灘沿岸の鯛の地漕網について調べると、鐘崎が網つくりの師匠を連れてくるだけあって、糸島の西ノ浦が もっとも古く、元文二年（一七三二）に始めて地漕網を行い、その后、寛政二年（一七九〇）に今日の二艘張を開発している。安永二年（一七七三）から明治維新にかけて藩主に鯛を献上し、また大正天皇御即位にあたっては、大饗祭祝代物として乾鯛を調進している。これから見ても西ノ浦の鯛網が全国に有名であったことが知れる。その盛況ぶりは「一春風駘蕩の候に至れば、鯛網見物とて、遊客の来るもの頗る多し」と筑豊沿海誌は伝えている。鯛網の歴史としては鐘崎が西ノ浦より五年ばかり古いが、西ノ浦の鯛網が盛になった大きい原因は二艘張の漁法を開発したところにあると云えよう。（享保元文年間の漁法を知るには多少時日を費す必要がある。）



昭和初年の鯛地漕網の状況は「福岡県漁村調査」鐘崎の項に詳述されている。

水産業共同経営
鯛地漕網漁業　二組、
四人宛共同と記され、
水揚高は二組で四二五〇円となっており
シイラ施網　九組
一一七〇〇円
鰹刺網　四組
九一〇〇円

について第三位となっている。また二組あったりの水揚高は第二位であり、鐘崎漁業のなかで重要な地位を占めていたことがわかる。

地漕網によって獲れた鯛は、和船時代には「ブエンで売れるものは、その日のうちに筑豊方面まで売りさばき、残りは塩漬けにしたり、塩焼にして加工しました。儂らが子供の頃には、お袋がよく夜なべて焼いていたものです。」とは花田国五郎さん（明治二十九年生）の話。また宗岡宗一さんは「機械船になってからは、博多の魚市場が値がよかったので全部あちにだしました。若松の方にはだしたことはありません。」と語った。

これほど隆盛であった地漕網が近年さびれたのは、沿岸に魚がよりつかなくなったからだ、と漁民は口を揃えて言う。事実「まき網漁場の変せん図」（註）を見ても漁場は沖へ沖へと拡大するいっぽうである。

――◇――◇――

守る会」で海岸歩きをしたが、会員の永田寿子さんは、波に洗われた絵の為貝殻の破片を拾っておられる。それが丁度ペンダントにしてもよい大きさになっているのである。こういう拾い方もあるものだと感じたことがある。

漂着物も、なんでもかんでもみんなと一緒に拾うのではなく、自分のテーマをもって拾うならば、まねでない楽しさを味合うことが出来るのではないかと思う。

さてビンに戻そう。漂着したビンの表面を見ると、エボンガイやフジツボ等が付着し、ながい漂流の旅を続けてきたことが知れる。また漂着したまま砂に埋もれ、その一部だけが出ていると、そこは砂に磨れて、透明なものも、磨り硝子状になってしまい、偉大な自然の力を見せつけてくれる。また割れたビンは小さな破片になり、波に洗われて、すっかり角もとれ丸味をおび、青や緑、白と小さな塊となって、波打ち際に漏れ、宝石のような妖しい光を放っている。そんなガラス塊を見ると「きれいだなあ」とついポケットに入れて持ち帰る。帰って取り出して見ると、妖しい光りはどこへやら「こんなもん、なんで拾ってきたんやろう―」とがっかりすることがある。自然へ帰ったものが、自然の中で燦然と光り輝く、そうとも言えるし、また以前「歴史と自然を

註　「宗像地区における漁業の生産展開の現状と諸問題」山下豊治（北九州工業専門学校教諭）

参考

大島村の河辺タキノさん（大正七・八年頃鯛網の地漕りのおいこみに山口県大浦の谷口さんという人が漕りに来ていました。」ということである。南方系の漁法であるので、この方法で漁をしていた智沢愛先生（明治四十三年生）から「昭和七年頃、沖ノ島でイサキの追込み漁に糸満がきていました。四・五人乗で三艘くらいでり、ユウノヒゲの様な草を手に持って海に潜って魚を追い込んでいました。あの頃は魚が多かったのでしょう。運搬船に移すときはスコップで積みこんでいたのを覚えています。」と同った。この糸満の漁法が残っていたものであろう。

「人事と信仰」

土産（みやげ）

古代では「つと」と呼ぶ。つまり苞苴（あらまき）で、"つつみもの"の意という。それから苞（わつと）で包んだものを藁つとなど呼んでいる。そのころの家つとは外出のときなどに花などを手折って帰宅するという例が多いが、都（みやこ）のつとなどとか、田舎のつとなどといわれるのは、地方からの土産を京都の家に持っていくことを指している。

この都のつとは物品はかりでなく、地方で見聞した話を伝えるこのはの」というのと同じ意味ですが、上代における神道の内容を表明するものと思われます。

その後国家の成長発展と儒教・仏教・道教・陰陽道などの外来宗教の影響を受けて、神の信仰に関する観念が変化していろいろな神道説ができました。

仏教と神道は当初反撥する気分もあったのですが、いつしか両者は接近習合し、奈良時代からは仏を本体と考える本地垂跡説が生まれ、天台宗では山王一実神道（吉神道）、真言宗では両部神道（御流神道）が唱えられ、日蓮宗さえ三千番神を仏法の守護神としました。

ところが鎌倉時代に伊勢の外宮の神官度会（わたらい）氏は、神が本体であって仏は従であると考え、度会神道（外宮神道・伊勢神道）を説きました。また室町時代中期になると、京都吉田神社の神職吉田兼俱（かねとも）も神道は諸宗の源で、仏教儒教は枝葉に過ぎないと説き唯一神道（吉田神道・卜部神道・宗源神道）を開きました。

更に江戸時代には林道春・中江藤樹などが儒教神道・吉川惟足が理学神道、山崎闇斎が垂加神道を説き、神道から仏教的なものを取去ることにつとめました。しかしこれらの神道は儒教的色彩が強かったのですが、江戸中期から荷田春満（かだあずまま）・賀茂真淵・本居宣長・平田篤胤などの国学者が相次いで出て国学の研究を進め、仏教儒教色の入らない純粋な神の信仰を明らかにしました。これが復古神道（古神道・純神道）と称するものです。

日本書紀の用明天皇の条に「天皇仏法を信じ神道を尊び給ふ。」とあるのが、文献上の初見とされています。古典には、この神道のほかに神ながらということばが出ております。惟神・随在天神（書紀大化三年の詔）・神随（万葉）・随神（続紀）などの漢字を当てているところからみて「天の神の思召しのとおりにやってゆく。」ということで、古事記中巻の伊豆志袁登女の（いずしおとめ）の物語にある「能くこそ神習（かんなら）はめ」というのと同じ意味ですが、上代における神道の内容を表明するものと思われます。